

安全性の説明よりも事実の周知重視を



関谷直也(せきや・なおや)氏略歴

社会心理学者。新潟市出身。1975年7月生まれ42歳。98年慶大総合政策学部卒。2004年東大大学院人文社会科学系研究科社会情報専門分野博士課程満期退学。東洋大、慶大、早稲田大で講師を務める傍ら、きょうも東日本大震災発災からの多数の官公庁委員を歴任。14年東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター特任准教授に就任した。13年から、東京電力福島第一原子力発電所事故における風評被害、消費者行動に関する経年比較、国際比較研究を行っている。

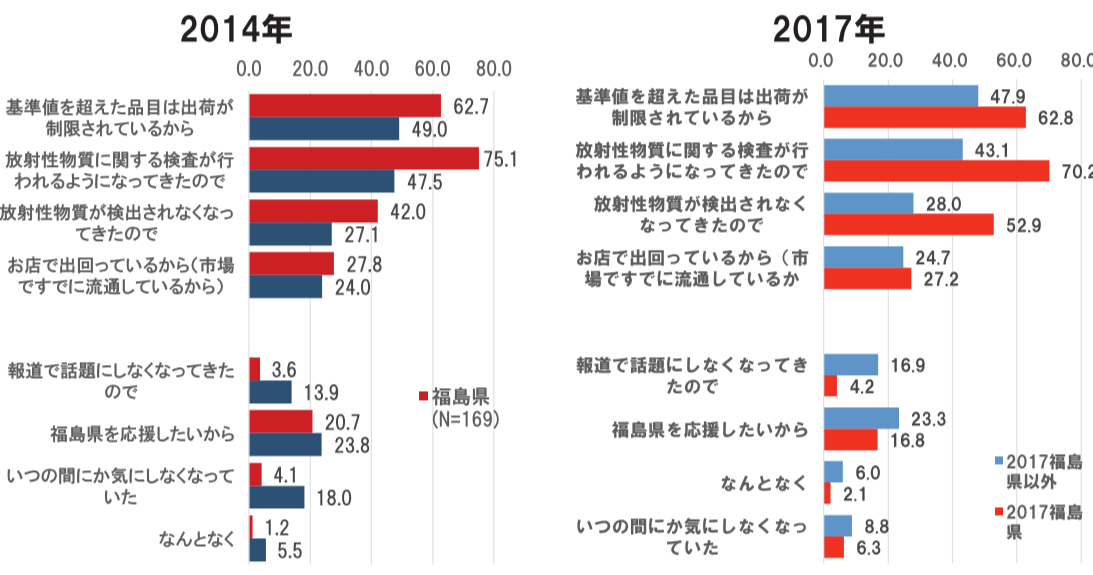
東日本大震災発生から7年。原発事故との複合災害に遭遇した福島県の水産物の回復はまだまだ道半ばだ。だが、同県沿岸で2014年から行っている試験操業は規模を徐々に拡大し、本操業へどう復帰するかの検討を望む声も聞かれ始めた。その時に間違いなく課題となるのがいわゆる「風評被害」への対応だ。同分野で先んじる農産物の動きを中心に、消費者の行動を観察してきた、社会心理学者の関谷直也東大大学院特任准教授に聞いた。

消費者行動の推移を調査して意味をさされてきて、分かったこと、事実とは何か。

検査の体制、結果が不安緩和 福島県産に対する消費者行動

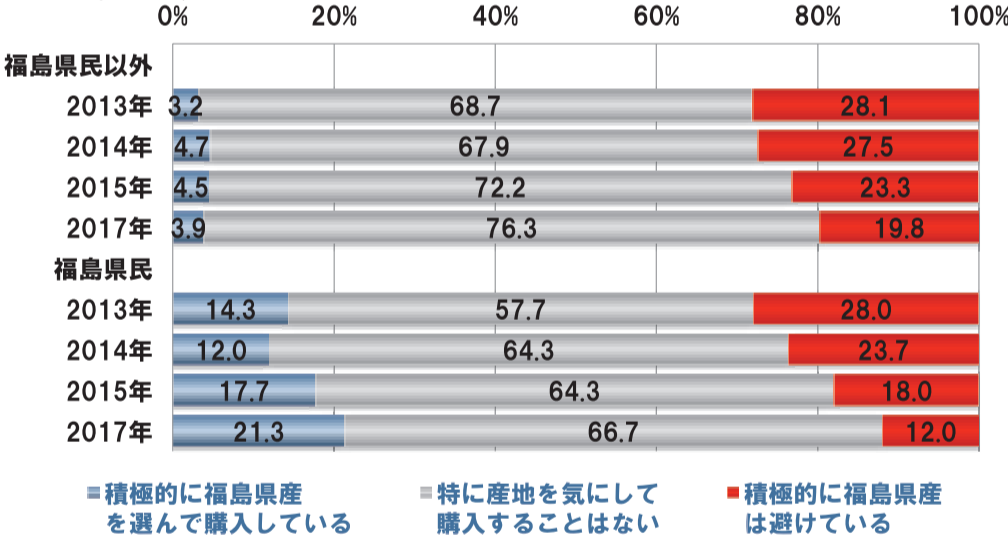
グラフ1 モニタリング検査の意味：不安が和らいだ理由

食品購入について不安が薄らいだのはなぜだと思いますか。当てはまるものをいくつも選んでください。(いくつでも)
●主な回答
「放射性物質に関する検査が行われるようになったので」
「基準値を超えた品目は出荷が制限されているので」
「放射性物質が検出されなくなってきたので」



グラフ2 食材に対する意識「福島県産」への抵抗感

普段食べる食品、特に福島県産についてお伺いします(単一回答)
●回答の傾向
-福島県産を拒否する人の割合は減ってきている。
-福島県産で、その変化は大きい。



「検査の体制、結果が不安緩和」

「検査の体制、結果が不安緩和」

「検査の体制、結果が不安緩和」

「検査の体制、結果が不安緩和」

「検査の体制、結果が不安緩和」

「検査の体制、結果が不安緩和」

「検査の体制、結果が不安緩和」

「検査の体制、結果が不安緩和」

海産物調査で5万件突破 1月の不検出99.6%

Table with 5 columns: Year, Month, Total number of samples, Number of samples exceeding 100 Bq/kg, Percentage of samples exceeding 100 Bq/kg, Number of non-detectable samples, Percentage of non-detectable samples. Data for 2011-2018 and monthly data for 2018.

国から出荷制限の指示がなされている海産魚介類(福島県沖で漁獲された品目) ウミタナゴ、キツネメバル、クロダイ、サクラマス、シロメバル、スズキ、アマダイ、ムラサキ、ピノスガイ、カサゴ

福島緊急時モニタリング

最新の不検出(=検査0.2%)に比べ、4.4倍上昇している。検査の体制、結果が不安緩和

スタッフ総出で試料準備

福島水試・緊急時モニタリングポ 漁場環境部 緊急時モニタリングポ

